

# まいんど マインド Mind

藤田 庄市 ジャーナリスト

シリーズ <102>

## 遠寿院荒行僧(下)

### 集団脱走事件の真相と今

前回(10月21日号)は74年前(1947)の日蓮宗荒行僧54名集団脱走事件について「正中山遠寿院加行門人帳(都守基一翻刻・解題・遠寿院刊)をもとに記した。この事件は現在、日蓮宗が直轄する行堂設立の淵源となり、その後、きわめて複雑な経緯を経て、教育機関と位置づけられた法華経宗立行堂と、400年の信仰伝統に拠る祈禱修法を相伝する日蓮宗遠寿院行堂の並立に到った。以下、現時点から、画期となる1947年を中心に、行堂周辺の様相とそこに関わった人物を点描してみよう。

まず前提として宗門の権力について確認する必要がある。近代の政治体制下において仏教教団はそれぞれ中央集権的に改変されたものの、日蓮宗の場合、外観はともかく内実には江戸時代の各本山の信仰伝統による運営がなされていた。しかし、1940年(昭和15)の宗教団体法によって本末関係が解消される、僧侶の養成(修行)、僧階授与(信仰ヒエラルキー)、住職任命権など本来信仰伝統に根ざすものが教団の行政機関によって執行されるようになった。ゆえに教団の権力を握った者が、宗制には伝統による信仰秩序も破壊、改変が可能であった。

集団脱走事件の背後の首謀者である。事件当時、法華経寺は増田氏と打合せの上、秘密裡に行堂開設を進めていた。脱走首謀者が「俺たちにはお偉いお方が応援してくれるんで」と捨て台詞を残し、法華経寺に走り去ったのはどうした事情があったのである。彼らは事件を起こし、それを理由にして法華経寺に新たな行堂を開設する算段だった。しかし、宗派合同が挫かれたため、法華経寺は行堂問題では1972年の合同成立まで表面に出てこない。一方、同年、遠寿院(仲北日誠住職・伝師)は日蓮宗を離脱し単立寺院として開堂した。

1949年に日蓮宗は「宗本一体制」(総本山身延山久遠寺住職が宗派の普長)とし、そのもとで新しく身延山に行堂を開設した。宗務総監(現在の宗務総長)であり身延山総務の増田宣輪氏が行堂の「正伝師」を名乗った。彼は遠寿院の五行(五度)成満者だった。この増田氏がじつは

2月か3月に決めていたよ。うた。そのため表面では仲北氏外しの動きのなか、宗門は9月17日に身延山信行道場を借りての開堂を決め、19日には入行審査会を開き、126名に許可を出した。宗門は遠寿院を無視したのである。しかし宗門には最も根本である修法に関する信仰伝統が欠如していた。可視的には遠寿院に伝わる祈禱本尊鬼子母神像や祈禱相伝書などの文物で、そこで宗門はそれらを引き渡すように強要したという。が、仲北氏はそれを拒否。ここに宗門権力と信仰伝統の葛藤を見ることが出来る。そのため、宗門の行堂は東京の喜徳教会(後、魔寺)が奉納した鬼子母神像を本尊とし、祈禱相伝書は五行成満者である小田教博氏が行中に書写したものを引継ぐこととした。

この年、何があったのか。水面下の激しい動きも、すでに宗門中核は身延山で行堂を開設することを期していた。宗門行堂の話がまだ明らかでなかった1月には、東京修法師会(仲北氏に遠寿院行堂開設を要望していた。が、宗門による仲北氏外しがあからさまになり、9月には遠寿院に縁のある宗門関係者は離反してしまっただけでなく、仲北氏と檀信徒総代7名のみが信仰伝統を守る意思を固め、遠寿院は日蓮宗から離脱し単立寺院の道を選ぶ。そして開堂を宣言。この時、宗務当局

は遠寿院は日蓮宗ではないので入行者は懲戒規定により罰則の対象となるとの通告を出した。だが44名(うち初行29名)が入行した。重要なのは、単立化を果たしたのは、戦後新憲法と宗教法人令(当時)に基づく宗教の自由の体制下だったことである。法制は遠寿院の信仰伝統を守る機能を果たした。また、遠寿院の行堂を守ったのは、宗門の僧侶ではなく檀信徒だったことは記憶していいだろう。

それにしても疑問がある。宗門の行堂が本尊と書写した相伝書を持ち寄ったからといって、法を相承したことになるのだろうか。それにしても疑問がある。宗門の行堂が本尊と書写した相伝書を持ち寄ったからといって、法を相承したことになるのだろうか。それにしても疑問がある。宗門の行堂が本尊と書写した相伝書を持ち寄ったからといって、法を相承したことになるのだろうか。



それにしても疑問がある。宗門の行堂が本尊と書写した相伝書を持ち寄ったからといって、法を相承したことになるのだろうか。それにしても疑問がある。宗門の行堂が本尊と書写した相伝書を持ち寄ったからといって、法を相承したことになるのだろうか。

## 根本の信仰伝統を欠いた宗門行堂

1949年以來、今に至るも遠寿院を取り巻く状況は起伏に富む。1956年に遠寿院は宗門に復帰するが、管長で久遠寺法主となっていた増田氏は遠寿院の住職が仲北氏である以上、行堂を宗門公認としなかった。疲弊した仲北氏は住職を退任する。なお、増田氏は当時、身延山の山林を大量に伐採し売り払い、それが洪水を引き起こし、ために身延山を退くことになった。ほかにも不祥事があり、僧階剝奪を迫られ法華経寺(当時、中山妙宗)に逃れ、増田氏は元ヤクザの「大物石翼」である武井敬三氏を招いた。彼は、のち日蓮と称して大僧正、中山妙宗監督に就き、日蓮宗との合同を1972年に果たす。その「覚書」の中に「荒行堂は法華経寺に一本化する」とあった。

1974年には法華経寺に宗立行堂が建設、開堂され、正伝師には脱走の首謀者久村謙道氏が就いた。一方、遠寿院は関係者の多くが同寺を去るなか、信仰伝統を守るべく単独開堂に踏み切る。入行者は2名だった(前年に遠寿院は54名、久遠寺の宗門の行堂は135名が入行)。1975年に遠寿院住職・伝師の戸田日輝氏は有志と「尊神を守る会」を結成し(毎日新聞特別報道部取材班「宗教を現代に問う(上)」角川文庫、148頁〜156頁)、ここから遠寿院、法華経寺(宗門)の並立時代が始まったのである。

久村氏について付け加えよう。事件背後の首謀者だった増田氏もいろいろ問題を起こした人物だったが、脱走を現場指揮した久村氏もかなりの人物であった。「地上の帝王・早坂太吉」と親交があり、とかくの話がまとわりついていた(佐野真一「あぶく銭師たちよ」ちくま文庫、63頁〜118頁に詳しい)。

傍から一見すれば、行堂問題は、宗門内のコップの中の嵐である。しかし、国の体制、近現代教団権力と信仰伝統、行における宗教倫理と社会倫理など、背景をふくめて問題を追究する歴史・社会への広がりが見えてくるのである。

※筆者は遠寿院が2017年から推進中である行堂改革の外部委員である。本稿は影山教俊著「日蓮宗とは何か 日蓮宗加行所をめぐる戦後60年の光と影」と遠寿院の戸田日輝伝師の教示に事実経過の認識を負っている。事実の誤りや、ご意見があればご教示をいただきたく願っている。

ふじた・しょういち / 1947年東京生まれ。フォトジャーナリスト。日本写真家協会会員。著書に『行とは何か(新潮社)ほか多数。